

介助犬アンケート結果

<p>介助犬の譲渡条件について 譲渡ですか、貸与ですか</p>		
<p>障害者の負担額およびその内容</p>		
<p>トレーナーまたは訓練委託先について 現在のトレーナーの数</p>	<p>1名（地元の訓練士、ドッグファームSHINYA） （警察犬、救助犬、家庭犬育成のプロ）</p>	
<p>トレーナーの最終学歴 犬の訓練を学んだ場所 介助について学んだ場所</p>		
<p>訓練を他機関または組織に委託したことがありますか</p>		<p>はい（犬の幸せを考えるトレーナーであること） 服従訓練でなく、人の気持ちを読み取り、考え行動する犬 （Thinking dog）を育てるトレーナーであること 人と犬の共存を目的とし、犬社会に差別が起きないようにする （純血種と雑種）（Working dogと家庭犬）</p>
<p>5. 犬の適性評価方法について 行動学的適性評価について</p>		
<p>6. 介助犬の認定および訓練について 貴会の介助犬としての認定基準</p>		<p>ALF&MAX Dog's Homeの白井トレーナーの認定による</p>
<p>訓練の流れ 各訓練開始の年齢と期間、訓練所か家庭か</p>		

介助犬アンケート結果

交通機関、店舗等における訓練を行う際、困ったことは		
7. 介助犬使用者の社会参加状況について 貴会が訓練された介助犬の使用者は積極的に社会参加しているか		当会ではなし
介助犬使用者から介助犬と共に外出する上で問題があったことを聞いているか	県庁、市役所（盛岡）、デパート、レストラン（ともに盛岡市内）にナナを同伴しても問題なく受け入れられた	当会ではなし
貴会は介助犬使用者に介助犬を伴った社会参加に対してどのような教育を行っているか		まず社会の最小単位である家庭での暮らし、介助犬も含めて家庭の絆、犬との絆を深め、互いに尊敬しあうことが何より大切。その基盤があってこそ社会に与える意義も自然と深まると考える
8. 育成および組織運営における問題点について 育成および組織運営にかかる予算に公的補助を受けていますか		いいえ
9. 介助犬に関して行政機関ならびに社会に対しての要望		現在も日本全体では40万頭もの尊い命が行政処分という形で葬られている。実験犬も含めればさらに多くなる 犬を飼うのも、犬の問題でなく、飼う側の人間に大きな問題があることは、周知の通りである 人と犬との共存が社会に浸透していないため、「犬はお断り」という日本社会になっている。従って、介助犬も同様な扱いを受ける。このような日本的土壌をつくりかえることが急務
10. 育成や訓練ならびに譲渡や組織運営に関して問題等があれば		犬の訓練方法について：人間社会に服従させるために、強制的な訓練は問題だと思う。あるトレーナーが私の目の前で介助犬の訓練中、何度も犬の足を踏み、「犬はこうして動かないよ」ということを見せていた。犬を踏みつける人は障害者も踏みつけるに違いない
11. その他	いろいろな介助犬を育てるのではなく、障害者の需要に応じて供給する楽しく働く介助犬（例えば、アメリカ・スーザンダンカンさんの介助犬	国に対して：国が介助犬の調査研究をされる段階にきたことは大変喜ばしいことである。「人と犬との絆・共存」という教育

介助犬アンケート結果

のように、双方が楽しいことが最も重要)
介助犬にランク付け必要 (1種、2種、3種など)
3種しか認めないのではダメ (困る)
3種を作るには3年、1種であれば半年

事業にも関わる重要なテーマに研究班が取り組む必要がある

介助犬アンケート結果

番号	5
介助犬育成組織名	ALF&MAX Dogs Home
代表者氏名	白井里辺香 & 中山有美
郵便番号	
住所	
電話	
ファックス	
回答者氏名	白井里辺香
1. 育成組織について	
設立年月日	1996.5.1
設立趣意	良質な家庭犬の普及と犬を飼う人の意識改革
組織の特徴	資料なし 犬の意志を尊重する、犬から学ぶという精神で行うトレーニング方法 飼い主（レスピエントを含む）側の指導に重点を置く 会の趣旨に合うレスピエントと犬がいたら、介助犬を育てる 会の趣旨に合う人を研修生として受入れ、トレーナーとしての指導を行う 研修終了後は、それぞれが自立・独立し、互いにつながりを持っていく Thinking dogsを育てる
2. 介助犬について	
過去に育成した介助犬	6頭（全てアメリカ国内で）
犬種	
実働年数	
使用者の年齢	
使用者の性別	
基礎疾患名	
障害名	
在住区域	
犬種	
実働年数	
使用者の年齢	
使用者の性別	
基礎疾患名	
障害名	
在住区域	

介助犬アンケート結果

現在訓練中の犬は何頭	2
訓練中の犬のうち、レシピエントが決まっている犬は何頭	2
訓練終了後の介助犬の実働予定地	愛知県岡崎市と神奈川県横浜市
介助犬として対象にしている犬種	何でも可（成犬からでも可） 仕事内容が犬の負担にならず、犬の個性が介助犬に向いていれば種類は問わず
障害者自身が飼育している犬を対象にしているか？	している（基本的には、こちらを勧めている） 犬にとって飼い主が変わるのはつらいし、レシピエントとの信頼関係を結ぶのが困難
3. 介助犬使用者について	
障害の種類は肢体不自由のみですか？	はい
障害者の年齢に制限はありますか？	ある（年齢ではなく、その人が精神的に自立できるかどうか）
障害の種類、在住区域、環境、経済的背景などの条件	介助犬は犬の心を利用する必要がある。犬の心を幸せに出来る人 犬にストレスがたまらないような（人的、物的、空間的）配慮が必要 リタイア後も犬をことを考えることが出来る人
4. 育成および処方体制	
介助犬使用者選出から介助犬処方の流れ	レシピエント希望者→医者・トレーナーの面接・審査→レシピエント登録 →犬とのマッチング→犬にマナーを教える（トレーナーまたはレシピエント）→犬と生活 トレーナーの指導により介助犬としてのトレーニング→合同合宿（場所も重要）→継続指導
医療との連携体制について	
介助犬希望者の基礎疾患および障害に関する情報	レシピエントの担当医から伺う

介助犬アンケート結果

<p>介助犬の譲渡条件について 譲渡ですか、貸与ですか</p>	<p>譲渡（レシピエントまたは犬にストレスが生じた時には、こちらの意志でレスキューする）</p>
<p>障害者の負担額およびその内容</p>	<p>（犬のトレーニング期間による）トレーニング代金</p>
<p>トレーナーまたは訓練委託先について 現在のトレーナーの数</p>	<p>1</p>
<p>トレーナーの最終学歴 犬の訓練を学んだ場所 介助について学んだ場所</p>	<p>青山学院女子短期大学中退 Independence Dog Inc.（6ヶ月間） ボランティアとして個人宅で学ぶ（既に8年）</p>
<p>訓練を他機関または組織に委託したことがありますか</p>	<p>いいえ</p>
<p>5. 犬の適性評価方法について 行動学的適性評価について</p>	<p>子犬（両親を見ることが出来たら見る）からのとき：2～3ヶ月でテスト、物事に興味のある犬 他の生き物（人や犬や猫）にフレンドリーな犬、人の後をついてまわる犬、何をされても反抗しない犬 成犬からのとき：Thinking dogかどうか調べる、他の生き物に対してフレンドリーな犬、物事に興味のある犬 トレーニングを始めてから：マイペース、ハイパー、シャイ、アグレッシブさが出てきたら、1カ月ほど様子を見て判断する</p>
<p>6. 介助犬の認定および訓練について 貴会の介助犬としての認定基準</p>	<p>社会生活、家庭生活でのマナーを身につけている レシピエントは犬の身心を満たし、犬はレシピエントを物理的にサポートし、精神的な支えになっている レシピエントも犬もハッピーであること 犬が健康体であること、仕事をパーフェクトに行ったとしても、それより楽しいことを持っている犬はダメ 何よりも介助犬としての仕事を好む犬のみ認定（仕事=好きなこと=特技）</p>
<p>訓練の流れ 各訓練開始の年齢と期間、訓練所か家庭か</p>	<p>現在は介助犬のみを希望しているレシピエントは対象にしていない 犬と暮らしたい障害者を対象にしているため、最初からレシピエントには参加してもらい、自分の犬をトレーナーに依頼する形をとっている パピーテスト（8週から4ヶ月位）→トレーナーのもとでマナーを身に付ける（1～3ヶ月） →レシピエント宅で絆を深めるため生活（1歳位まで）→介助犬の仕事を学ぶ&セラピーとしての心を学ぶ アダルトテスト（6ヶ月位～2歳位）→トレーナーのもとでマナーを身につける（1～2ヶ月）→レシピエント宅で絆を深める生活（2～4ヶ月）→合同練習</p>

介助犬アンケート結果

<p>交通機関、店舗等における訓練を行う際、困ったことは</p>	<p>「犬の命を尊愛の意と責任を持って面倒をみる」ことが必要 ある（入店お断り、テスト乗車のため事前に報告必要） テスト乗車の目的が明確でないなど疑問がある</p>
<p>7. 介助犬使用者の社会参加状況について 貴会が訓練された介助犬の使用者は積極的に社会参加しているか</p>	<p>はい</p>
<p>介助犬使用者から介助犬と共に外出する上で問題があったことを聞いているか</p>	<p>はい（入店拒否、街の造りが犬と歩くのに不便、車イスの通れない歩道が多すぎる、仕事をする犬が可哀想という視線、外出先でトイレとリフレッシュさせる場所がない）</p>
<p>貴会は介助犬使用者に介助犬を伴った社会参加に対してどのような教育を行っているか</p>	<p>レシピエントがどのような社会参加をしたいのかによって、指導内容は変わりますが、レシピエントがいろいろなことを自ら考えられるようにサポートする。アドバイスするが答えは出さない。</p>
<p>8. 育成および組織運営における問題点について 育成および組織運営にかかる予算に公的補助を受けていますか</p>	<p>いいえ</p>
<p>9. 介助犬に関して行政機関ならびに社会に対しての要望</p>	<p>介助犬が社会で快適に暮らすためには、社会の犬に対する認識や一般の犬たちおよび飼い主のレベルを向上させる必要があるため、以下の事を要望します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「犬はつないで飼う」という規則の見直し 2. 交通機関への乗車および公共施設の利用 許可を得る際、誰がどのような基準でテストするのか？人に迷惑をかけないという一般的なマナーを守れないというのは当然であるが、型を決めて、それができるからOKというのはナンセンスである。一般の人がどこまで介助犬の表情をジャッジできるのか疑問である。 3. 公園の開放とドッグランの設置 ドッグランの管理をする人は犬に対する正しい知識のある人を選ぶ。ドッグランにはマナーの正しい犬だけ入れるようにする 4. しつけ教室の開催 5. 条例でよいので、ワクチン、フィラリアなどを狂犬病予防接種のように義務化する 6. 犬を不適切に飼っている人に対して指導したり、罰則を設ける 7. マイクロチップの導入による捨てられた犬の飼い主に対する罰金や迷子犬の保護 8. ブリーダーや訓練所における不適切な繁殖、悪辣な環境の取締り 9. 動物の医療保険（治療費の統一化）
<p>10. 育成や訓練ならびに譲渡や組織運営に関して問題等があれば</p>	<p>育成についての問題：正しい知識や技術を身に付けたトレーナーが余りに少ないため、犬たちは正しい介助犬としてのトレーニングを受けられていない 訓練についての問題：犬の心を読まず、表情を見ず、犬の意志を尊重せずに人の要求に服従させる訓練をしているため、犬にストレスを与えている また、訓練方法として褒めちぎって、叱らず、餌を使って甘やかす回避トレーニングをしているか、犬が恐怖を覚える程の体罰をする強制トレーニングの両極端なやり方のどちらかである</p>
<p>11. その他</p>	<p>新しい状況の中でもレシピエントの心を読んで、犬自らが考え（Thinking dog）、レシピエントを精神的にも</p>

介助犬アンケート結果

サポートできるようにトレーニングすべきである
譲渡についての問題：1) なぜ介助犬と暮らすのか、人やロボットの介助ではいけないのか？
①物理的な介助をしてもらう（介助犬→レシピエント）
散歩やブラッシングをすることでリハビリ効果がある（レシピエント→介助犬）
②精神的に支えてもらう（介助犬→レシピエント）
世話をすることにより責任感や生甲斐が生まれる（レシピエント→介助犬）
精神的に支えてもらうにはセラピードッグとしての素質も持ち合わせていなければならない
レシピエントは犬の心を読み取れ、表情を見られる人でなければならない
犬のことを深く理解できるレシピエントでなければならない、ということは、そういうレシピエントになってもらうためのレクチャーが必要
2) 譲渡先の条件
①レシピエントを取り巻く家族やボランティアの協力があるかどうか
犬の散歩や万一のときのケア等
②介助犬が老齢になったときのアフターケアができるかどうか
レシピエントあるいは家族、友人で日常的に往き来のある人が老後の面倒をみるのが最善である
③パピーホームも上記の人々がするのが最善である
犬との信頼関係ができ、レシピエントとその周りの人のその犬に対する責任感が変わる
組織運営の問題：海外では企業の多額の寄付によって運営資金は確保されているためレシピエントの負担が非常に少なくすむが、日本では行政の補助がなければ不可能と思われる

介助犬アンケート結果

番号	6	7
介助犬育成組織名	日本介助犬トレーニングセンター	介助犬協会（トレーナーを入れて11名）
代表者氏名	足達利明	能條正義
郵便番号	606-8102	192-0024
住所	京都市左京区高野清水町86-1	東京都八王子市宇津木町817-3
電話	075-781-7345	0426-91-6512
ファックス	075-781-7345	
回答者氏名	回答得られず	矢澤友枝
1. 育成組織について		
設立年月日		1995年7月1日
設立趣意		資料参照
組織の特徴	介助犬の定義、トレーナーの認定、介助犬の認定など既に厚生省に提出済み 医者〔京都大学〕、作業療法士、獣医師、訓練士、動物行動学者など既にチームを構成 訓練マニュアルもある 障害者のための安全な犬、障害者中心 健常者がサポート	犬のトレーニングは陽性強化法 犬の適性を重んじて、育成していく 合同トレーニングはトレーナーが1ヶ月レシピエント宅に通って行う
2. 介助犬について		
過去に育成した介助犬	6頭（日本全国で9頭のうち6頭を育てた） （京都に5頭、北海道に1頭）	2頭
犬種		ラブラドル・レトリバー
実働年数		1995年から3.8カ月
使用者の年齢		49歳
使用者の性別		男性
基礎疾患名		筋ジストロフィー
障害名		筋ジストロフィー
在住区域		東京都西多摩郡
犬種		ラブラドル・レトリバー
実働年数		1996年から2.5年
使用者の年齢		38歳
使用者の性別		男性
基礎疾患名		脊椎損傷
障害名		兵庫県宝塚市
在住区域		

介助犬アンケート結果

現在訓練中の犬は何頭	36名の障害者（北海道から九州まで）が介助犬を待っている	2頭
訓練中の犬のうち、レスピエントが決まっている犬は何頭		2頭
訓練終了後の介助犬の実働予定地		東京都と千葉県
介助犬として対象にしている犬種		犬種を問わず（雑種犬でも適性があればOK）
障害者自身が飼育している犬を対象にしているか？		している
3. 介助犬使用者について		
障害の種類は肢体不自由のみですか？		はい
障害者の年齢に制限はありますか？		ない 基本的に自己管理ができている方 高齢者の方は障害の状況や二次疾患などに留意して判断 進行性の疾患では基準が厳しくなる
障害の種類、在住区域、環境、経済的背景などの条件		犬を伴侶として考えていること（便利なロボットではない） 本人の意志で介助犬と一緒に生活を望んでいる人 環境・経済的な面は互いに折り合いがつけばOKです 犬の世話はご本人が実際にできなくても、犬の世話をして下さる方を見つけ、その方にシャンプーや雨の日の散歩等を頼む
4. 育成および処方体制		
介助犬使用者選出から介助犬処方の流れ		資料参照
医療との連携体制について 介助犬希望者の基礎疾患および障害に関する情報		トレーナーが介護福祉士でもあり、今まではトレーナーの判断と主治医の方に健康面でチェックをしてもらっていただけです

介助犬アンケート結果

<p>介助犬の譲渡条件について 譲渡ですか、貸与ですか</p>		<p>今後はもっと医療従事者の方々と連携していきたい 両方あり（持ち犬の場合は所有者はレシビエント）</p>
<p>障害者の負担額およびその内容</p>		<p>15万円（盲導犬を参考にして）</p>
<p>トレーナーまたは訓練委託先について 現在のトレーナーの数</p>		<p>1（見習い3名）</p>
<p>トレーナーの最終学歴 犬の訓練を学んだ場所 介助について学んだ場所</p>		<p>和泉福祉専門学校 テキサスヒアリングドッグセンター 介護福祉士（在宅介護9年） トレーナー見習い3名（秋田大学、大阪女学院短期大学、高校）</p>
<p>訓練を他機関または組織に委託したことがありますか</p>		<p>いいえ</p>
<p>5. 犬の適性評価方法について 行動学的適性評価について</p>		<p>基本的には放棄犬の中から選ぶ。1～2歳位までで、人はもちろん、他犬、他の動物に対しても異常な興味を示さない犬。 仕事に応じて適性が変わる。好奇心があり、何でも興味を示し、人間と一緒に何かをすることが好きな犬が良い場合もあれば、逆に、杖の代わりになる犬は、いろいろなことに余り興味がない方がよい</p>
<p>6. 介助犬の認定および訓練について 貴会の介助犬としての認定基準</p>		<p>レストラン、スーパーなどでルールを守った行動ができる 必要に応じた仕事ができる（落としたものを拾う、ドアの開閉、電気のOn-Offなど） 今後、まとめる予定</p>
<p>訓練の流れ 各訓練開始の年齢と期間、訓練所か家庭か</p>		<p>資料参照</p>

介助犬アンケート結果

<p>交通機関、店舗等における訓練を行う際、困ったことは</p>		<p>ある（レストラン、スーパー等は比較的問題なし、電車、バス等の公的な所は困難が多い）</p>
<p>7. 介助犬使用者の社会参加状況について 貴会が訓練された介助犬の使用者は積極的に社会参加しているか</p>		<p>はい</p>
<p>介助犬使用者から介助犬と共に外出する上で問題があったことを聞いているか</p>		<p>はい どこへ行くにも許可をとらなければならない</p>
<p>貴会は介助犬使用者に介助犬を伴った社会参加に対してどのような教育を行っているか</p>		<p>合同トレーニングの時に指導していましたが、今までは結構いい加減でした</p>
<p>8. 育成および組織運営における問題点について 育成および組織運営にかかる予算に公的補助を受けていますか</p>		<p>はい（兵庫県宝塚市のみ、ハーネス代を市が負担）</p>
<p>9. 介助犬に関して行政機関ならびに社会に対しての要望</p>		<p>行政の先行投資に期待</p>
<p>10. 育成や訓練ならびに譲渡や組織運営に関して問題等があれば</p>		<p>資金、人材すべてにおいて不足です</p>
<p>11. その他</p>		

介助犬アンケート結果

--	--	--

介助犬アンケート結果

番号	8
介助犬育成組織名	介助犬を育てる会
代表者氏名	坂根毅彦
郵便番号	603-8427
住所	京都市北区紫竹緑町48-3
電話	075-495-0419
ファックス	075-495-0435
回答者氏名	坂根ゆかり
1. 育成組織について	
設立年月日	1996年11月1日
設立趣意	資料参照
組織の特徴	犬の問題と障害者問題を混同しない 福祉の一環として活動する ボランティア精神に忠実に活動する 一般の犬飼育者のモラルの向上に努める
2. 介助犬について	
過去に育成した介助犬	4頭
犬種	ラブラドル・レトリバー
実働年数	1997年から
使用者の年齢	41歳
使用者の性別	男性
基礎疾患名	なし
障害名	脊髄損傷による両下肢機能全廃
在住区域	奈良県
犬種	ラブラドル・レトリバー
実働年数	1997年から
使用者の年齢	37歳
使用者の性別	男性
基礎疾患名	なし
障害名	脊髄損傷による両下肢機能全廃
在住区域	京都市
犬種	ラブラドル・レトリバー
実働年数	1997年から
使用者の年齢	37歳
使用者の性別	男性
基礎疾患名	なし

介助犬アンケート結果

障害名 在住区域	脊髄損傷による両下肢機能全廃 京都府
犬種 実働年数 使用者の年齢 使用者の性別 基礎疾患名 障害名 在住区域	ラブラドル・レトリバー 1998年から 20歳代後半 男性 筋ジストロフィー 京都府
現在訓練中の犬は何頭	4頭
訓練中の犬のうち、レスピエントが決まっている犬は何頭	3頭
訓練終了後の介助犬の実働予定地	奈良県と京都府
介助犬として対象にしている犬種	犬種を問わず（雑種犬でも適性があればOK）
障害者自身が飼育している犬を対象にしているか？	している
3. 介助犬使用者について 障害の種類は肢体不自由のみですか？	いいえ 障害者手帳を持たない人でも対象（高齢者など腰痛や関節痛の人も対象）
障害者の年齢に制限はありますか？	ある 高校生以上
障害の種類、在住区域、環境、経済的背景などの条件	
4. 育成および処方体制 介助犬使用者選出から介助犬処方の流れ	障害の内容、介助犬に求めることなどコーディネーターによる面接→トレーナーに委託 →コーディネーター・トレーナー・使用者の三者面談→登録→基礎訓練（3～6ヶ月）→ 専門訓練（4～5ヶ月）→合同訓練（家庭や公共の場での訓練も含む）→公共交通機関へ の試験乗車→卒業
医療との連携体制について 介助犬希望者の基礎疾患および障害に関する情報	障害や病気によっても異なるが、特に進行型の病気の場合、使用者の主治医などいろいろな方と話し合い、介助犬のことを知って頂き、アドバイスや指示を頂いている

介助犬アンケート結果

介助犬の譲渡条件について 譲渡ですか、貸与ですか	譲渡と貸与
障害者の負担額およびその内容	譲渡の場合：トレーニング代（1ヶ月5～7万円）プラス登録費用5万円 貸与の場合：年会費5000円
トレーナーまたは訓練委託先について 現在のトレーナーの数	3（訓練を委託）
トレーナーの最終学歴 犬の訓練を学んだ場所 介助について学んだ場所	高校卒 民間訓練所、JAHA公認インストラクター 老人ホーム（犬を連れだ訪問活動で）
トレーナーの最終学歴 犬の訓練を学んだ場所 介助について学んだ場所	高校卒 民間訓練所、JKC公認訓練士 友人に障害者がいるので自然に身に付けた
訓練を他機関または組織に委託したことがありますか	
5. 犬の適性評価方法について 行動学的適性評価について	純血種の場合：両親犬の血統調査→仔犬の出産状況調査→管理調査→生後50～60日の調査→仔犬の健康調査→その後はケースバイケース
6. 介助犬の認定および訓練について 貴会の介助犬としての認定基準	使用者自身の責任で犬の飼育とコントロールができる 公共交通機関に正式に入場できる マスターが望む介助動作ができる マスターが愛情と責任と知識をもってコントロールできる
訓練の流れ 各訓練開始の年齢と期間、訓練所か家庭か	仔犬をもらい受けた時からトレーニング開始 パピーレイザーマニュアルに沿ってトレーニング（約10ヶ月から1年） 1年後から専門訓練（3～4ヶ月） マスターとの本格的な合同トレーニング（1ヶ月前後） 公共交通機関トライアル、正式に認可されれば介助犬認定

介助犬アンケート結果

交通機関、店舗等における訓練を行う際、困ったことは	ある（OKなら良いが、NOの場合、時間の無駄になり精神的負担が大きい）
7. 介助犬使用者の社会参加状況について 貴会が訓練された介助犬の使用者は積極的に社会参加しているか	はい
介助犬使用者から介助犬と共に外出する上で問題があったことを聞いているか	はい 断られる不安から、外出したいけれどもしにくい（精神的負担が大きい）
貴会は介助犬使用者に介助犬を伴った社会参加に対してどのような教育を行っているか	障害者と健常者の相互信頼が最も重要で、そこからスタートします。従って、教育ということではなく、人間同志のお付き合いができるように双方が努力する
8. 育成および組織運営における問題点について 育成および組織運営にかかる予算に公的補助を受けていますか	いいえ
9. 介助犬に関して行政機関ならびに社会に対しての要望	盲導犬は必要だが、介助犬は色々と障害者に対して公のサービス（ヘルパー等）があるから、必要ないと言われたことがある。甚だ遺憾である パブリックスペース、アクセスでのトレーニングをさせて欲しい。公の場所は、本来、誰でも利用できるのだから、ある程度は認めて頂きたい ボランティア組織としての活動には限界がある。早期に補助を求める
10. 育成や訓練ならびに譲渡や組織運営に関して問題等があれば	現在までに4頭の介助犬をトレーニングしてきたが、トレーナー（当会以外の）の技術レベルが高くない。指導するも、独自の路線があるので受け入れてもらいにくい。介助犬のトレーナーには介助犬をトレーニングする以前に「犬」を勉強して頂き、通常のしつけ（服従）をきちんと身につけて頂きたい 介助犬育成団体が自由に意見交換する機会がない。またユーザー同志がもっと自由に交流できるように努めたい
11. その他	

介助犬アンケート結果

--	--

まとめ

調査対象組織（8 団体）のうち、文書で回答された団体は 5 団体、3 団体は聞き取り調査（このうち、1 団体は基本的に回答拒否）である。

- ・ 調査項目の概略
- ・ 過去に育成した介助犬の数：日本国内で育成された介助犬の総数は 9 頭だと思われる。従って、本表の数には重複があるか、自称「介助犬」を含んでいることになる。
- ・ 現在訓練中の犬：大変少ない（8 頭）という印象を受ける。日本介助犬トレーニングセンターの具体的な情報は得られなかった。
- ・ 介助犬訓練士の現状：介助犬訓練に携わるトレーナーの数は大変少なく、彼らのほとんどが警察犬、家庭犬などのトレーナーである。
- ・ 交通機関、店舗等における訓練を行う際、困ったことは？
- ・ 介助犬使用者が介助犬とともに外出する上で問題があったか？
- ・ 介助犬に関して行政機関ならびに社会に対しての要望

調査項目の概略

1. 育成組織について
組織の特徴など
2. 介助犬について
過去に育成した介助犬、現在訓練中の犬など
3. 介助犬使用者について
4. 育成および処方体制
トレーナーの現状など
5. 犬の適性評価方法について
6. 介助犬の認定および訓練について
認定基準、訓練の流れ、交通機関、店舗等における訓練を行う際、困ったことはないか、など
7. 介助犬使用者の社会参加状況について
介助犬使用者が介助犬とともに外出する上で問題があったか？など
8. 育成および組織運営における問題点について
9. 介助犬に関して行政機関ならびに社会に対しての要望
10. 育成や訓練ならびに譲渡や組織運営に関する問題点
11. その他